

『琅』・あとがき

*二十年を越えて長くご懇意を頂いている廣江啓子先生主宰の「若葉会」第57回コンサートが、昨日、ルーテル市ヶ谷ホールで開かれた。毎度のことながら、すでにピアノリストとして知られるお弟子さんたちも参加し、ヴァイオリン、フルート、声楽なども加わって取りどりに楽しく、「音楽」の醍醐味を満喫させてくれる会だった。八〇代なかほどになられた廣江先生がショパンのピアノ協奏曲「第一番」第一楽章を中野祐子氏と力強く重奏、一段と胸を打たれたこの会の有り様から『琅』もまた、多彩な読み物を生む楽しいもの書き集団になればなあ、と刺激されている」とは、前号で洩らした私の痛切な言葉だったが、またしてもの思いである。

*本号は、記念すべき節目の30号。それが何としたこと、創刊以来初めて、「小説」の登載がない記念号とはなってしまう。これでは「多彩な楽しい同人誌」にはとてものこと届かない。この一、二年、こうなることを怖れ、本誌の面倒な割付・編集作業を松村茂治氏に少しずつ移していきながら、そろそろ小説事始とでも参りたいと思っていたが、それが未だ実行に移せない。いかにも無念、何故書か

*さて、本号評壇には、国情に照らして時宜にかなう論考が二編。一つは日文研・牛村圭教授の「歴史に向き合い、語り合うために」、他の一つが東京学芸大学・松村茂治名誉教授の「文部科学省にも申す」。私には、この両稿がともに、世の中の動静や国の将来に影響を与える重要な問題を前にしてはけっして単なる思いつきや感情論で論つてはならぬ、真つ当な文献を真つ当に精査した上で科学的に考察すべし、といった示唆を持つやに感知され、また、両稿がそのまま、それへの答えの一つとして提示されているやにも感得された。牛村教授の文章中には、「…（以上の拙見への読者諸賢のご教示を冀う）」の付言がある。皆様のコメントを、是非にも頂戴したいものである。

(4月11日 宗内 敦)

〈評壇・執筆者紹介〉

・牛村圭(うしむら けい) 国際日本文化研究センター教授。専攻は比較文学・比較文化。著書『文明の裁き』をこえて——対日戦犯裁判読解の試み』(中央公論新社(中公叢書)、二〇〇一年：第10回山本七平賞を受賞)。『戦争責任』論の真実』(PHP研究所)、『東京裁判を正しく読む』(共著、文春新書)ほか。

ない、否、何故書けないのだろうか——。

これもここの一、二年、その心得を学ぼうとて、これまでにない学習の心構えで、講読している日経新聞の朝夕連載小説を読み継いでいた。それなり何やら感得して、構想を練り出そうとしていた矢先、朝刊小説が今の『迷いの旅籠』(宮部みゆき)に代わってから、冷や水を浴びせかけられた。人間性の襲と言うか結びと言うか、はたまた突起と言うか、人の微妙な言動・所作がえも言われぬ言の葉で煽やかにさらりと描かれていく様に、たかが心理学徒の端くれなどでは到底及びもつかない作家の人間理解の深さと表現力を見せつけられ、小説を書くなどとてものことではないと、明々白々思い知らされた。真の作家とはかくも見事な物書きなのか——。小説を書く資格など、自分のどこにあるのだろうか。

『迷いの旅籠』では、様々な形で人間の心や体と一体化した化身が現れ、苦しむ人間をいつか救い出す。作者は、一体何を主題としているのか。興味尽きない題材を介して、善悪の次元を超えたレベルでの人間性の深奥を明かそうとでもしているのか。私には見当もつかない。この小説が終わり、もしその時点でそれを悟り得たなら、己を小説の書き手として出発させることがあってもいいかもしれぬ、と今ははかなく考えている。

・松村茂治(まつむら しげはる) 本誌同人。東京学芸大学を退官後に明治学院大学教授、東京学芸大学名誉教授。専門は教育心理学、学校心理学。主著に「学級臨床心理学」(福村出版)、「教育発達学の構築」(共編著 風間書房)など。本誌には、「私の文学館散歩」「アイ・ラブ・パリ」シリーズを連載中。

〈訃報〉

・同人 小沢芳治氏 昨年十二月一日、逝去。享年72。本誌創刊から参加。誠実一路、書くものすべて愛をもって取り組み、その姿勢、皆一様に範としてきた。東北大地震で壊滅した陸前高田のご親族の救援に没頭された亡きご令閨のあとを追うように没された。合掌。

〈次号原稿締め切り日〉 九月末日。

『琅』三〇号 二〇一六年四月発行

編集・発行 宗内 敦 松村 茂治

発行所 193-0822 東京都八王子市市川町二八上二〇二

「琅の会」・TEL(042-265-1127)

印刷所 株式会社ポプルス